

大学にて実施される高齢者支援活動を通じた参加者の心理的变化
－ 高齢者と大学生間の関わりに着目して－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
妻崎 希実

本研究では、A大学の学習療法活動に学習者として参加する高齢者と、サポーターとして参加する大学生を対象に、本活動が双方にとってどのような意味を持つのか、インタビュー調査を通して当事者の主観的体験を明らかにすることを目的とした。特に、高齢者と大学生間の関わりによる双方への心理的影響について検討した。

対象者は、活動に初めて参加する高齢者6名（平均年齢75.2歳）と、大学生6名（平均年齢20.5歳）であった。調査実施時期はX年6月から12月であり、高齢者と大学生各々に対し、活動に参加する前（6月）と参加した後（11月）の二回に分けて調査を行った。得られた発話データをM-GTAに基づいて分析し、概念表、カテゴリ表、結果図を四つずつ作成した。

高齢者調査の結果から、活動に取り組むうえで高齢者は、現在を自分中心に考えられる時期であると捉えており、自身の健康状態には満足していることが示された。それらの背景が参加の意欲を高め、活動へ能動的に取り組むことを支えていた。大学生との関わりはやりがいの一部となるが、直接の交流以上に、通学するにあたり若い雰囲気を感じるといった間接的な部分からのエネルギーを得ていることが示された。また、学習療法の基本的な考えを理解し活動に臨んでいることや、集団の場に継続して参加するという社会参加の意義を活動に感じていることも、高齢者の満足感につながっていた。このように、高齢者は活動の学習療法以外の側面にも魅力を感じており、高齢者の活動への意味づけの多様性が明らかになったといえる。

大学生調査の結果から、大学生は参加時に活動への期待と不安との両面的な思いを抱いていた。それらの思いは、祖父母など日頃の高齢者との関わりから構築された高齢者イメージの影響を強く受けていた。活動では関わりの難しさを経験しながらも高齢者との関係性を構築した。関わりの中で大学生は、丁寧な応対や高齢者主体といった心がけを持っており、そのような心がけが双方にとって肯定的な関係を築くことを助けていた。また活動は、大学生自身の祖父母への関わりや親の加齢について考えることにもつながっていた。さらに、大学生は人生において現在を変容する時期として捉えたうえで活動に参加しており、高齢者の様々な言葉に触れることは、自身の人生観を考える機会になっていた。

結果から、活動は高齢者にとって認知機能への働きかけだけでなく社会参加としての側面や、サポーターとして参加する大学生自身においても成長の場として機能する側面があり、今後、世代間交流や高齢者支援の場に活かせる重要な示唆が得られたといえる。